

## 仁川からの引揚げ2

2日後に、たぶん昔、アメリカの爆弾で橋が壊されたままになっていて、列車は止まって進んでいくことができません。目的地まではまだ半分も来ていませんでした。父は、プサンで船がどのくらい待っているか心配していました。私たちは再び南に向かって歩き始めました。確かな方角もわからない旅でした。しかしまずは、この小さな川を渡らなければならないのです。私たちはどの方角に他の人が向かうのか観察し、私たちの小さなグループもついていく決心をしました。私たちの小グループには頑丈な体つきの男たちがいました。

私たちは3~4km、大きなグループに続いて行きましたが、その後、川を渡れる場所を見つけようと急な土手を下りました。そして南へ向かう他の貨物列車に乗れることを願いながら。私たちが土手を下った時、そんなに深くなく、幅も広くない所を見つけました。たくさんの高齢者とたくさんの荷物は大きくなっていて、何回かに分けて渡さなければなりません。まず初めに荷物とそれから背中の小さい子どもたちを渡すことに決めました。私たちは向こう側の丈の高い草が生えている小さな原っぱで夜を過ごすことに決めました。野生の草花は小さな川の小石のある土手に育っていました。私たちは川を渡し、そして私は思いました。もし、母がここにいたら止まってきっと2~3本の花を摘んだらうなあと。

夜、落ち着き始めた頃、雨が降り出しました。私たちは風邪を引かないように雨宿りする場所が必要でした。川を渡ったので、ほとんどの人がまだ濡れていて寒かったのです。川から1kmも離れていない場所に、人けがなく、長い間訪れる人もなかったような農民の小屋をすぐに見つけることができました。たとえ小屋が小さくても、私たちの小グループが入るには充分で安心しました。嵐は一晩中続き、少し寒くなり始めました。着るものも何もありませんでした。小屋の真ん中に小さな火を燃やす所を見つけて、ついに衣類を乾かすことができました。

翌朝早く、男たちは外に探検に行き、人参の形をした大根の葉を見つけて帰って来ました。普通、大根の葉は食べられていません。でも汁がいっぱい出て私の口を潤しました。また、私たちの食料はほとんど無くなりかけていて、私たちはみんなとてもお腹がすいていたので、その葉っぱでスープを作ることにしました。スープは美味しくはなかったのですが、温かくいくらかお腹を満たしました。大根スープの朝食のあと、近くの泉で水筒に水を入れて、再びプサンに向かう貨物列車に乗れることを願って、線路を探して歩き始めました。

次の3日間、南に向かって歩きました。すべての村々と町には近づきませんでした。途中で、昨日も日本人の小グループが韓国の強盗団に襲われて、盗まれたり、殺されたりしたと聞きました。わずかな日本人だけが何とか逃げることができたそうです。

旅の4日目に、私たちはついに小型の貨物列車が南に向かう線路にいるのを発見しました。エンジンが煙を出していて、今にも発車しようとしていることがわかり、急いで乗ることに決めました。そこから目的地までどのくらいの距離があるのかわかりませんでした。父が石炭車の近くの横に登って見ると、中には他の日本人が隠れていて、顔と顔を合わせました。何人かに聞いてみた後、貨車はプサンに向かうことを確認しました。列車は空っぽで、

乗り込むのをだれも管理もしていないけれど、都市や町々を通りぬける時は、誰にも見つからないように、石炭車の上の方に隠れていなければならないと注意されました。幸いなことに、みんな次の空っぽの貨車の高い壁を登り始めました。父は他の人を助けるために自分のリュックを中に放り込みました。そして手を伸ばして、最初に祖母、広子、勝義を引っ張りました。私は下から押しました。私は最後でしたが、私は貨車に乗ることができませんでした。突然汽笛が3回鳴って、貨車はとてもゆっくり動き始めて、私は走ってついて行きました。目から涙が流れて来ました。貨車が速度を上げるとついて行けなくなって、私は取り残されてしまうと知りました。

貨車が駅の端まで来たとき、突然1分だけ止まりました。父が貨車の横にぶら下がり、叔父がその手をつかんでいました。そしていっぱい伸ばした私の腕を貨車の方に引っ張りました。腕は抜けそうでした。なぜ、貨車が突然1分間止まったのかは、私にはまったくわかりませんが、きっと機関士が子どもを見てかわいそうに思い、止めてくれたのではないかと思いたいです。(多くの年月の後に、たびたびそのぞっとする日を思うと、なぜ取り残されたのだろうと疑問に思うことがあります。私は自分自身に問うてみます。12歳の少女が地面にいて、弟や妹を先に乗せるために押し上げていた。そこには数人の大人もいたのに…。しかし、すでに答えは知っていました。“弟や妹を無事に乗せてしまうまでは自分は乗るわけにはいかない”という責任感だったことを。)石炭車は不潔で、昨晚の雨はその粉を重いペーストにしていますが、それでも歩くよりはずっとましでした。もう2日間の間、私たちは風が吹き付ける石炭車の内側に乗りました。そして3日目に、父はちょうどあと2~3分で大邱を通り抜けるころだとわかって、確信を持って力強くみんなに知らせました。みんな貨車の上の端から背伸びして見ることができ、もちろん私も大邱を見ることができました。

人間は飢えて疲れきっている時は、変な妄想をされると言われますが、私は大邱の家の二度と見ることができない家族のことなどすべて見ていました。

私はここでの最後の時に、母と一緒にいたことを思い出して泣き始めました。

ばからしいことですが、小さい黄色のボールはまだ玄関のドアの近くの下にあるかしら…。私は長い間このボールを持っていていつも友だちとそのボールで遊んでいました。そのボールとも友だちとももう会えません。母にももう決して会うことができません。私はゆっくり静かにまた貨車の中に戻って身を沈めました。もし母がいたら、そのボールを私に送ってくれるだろうか、と愚かなことを考えました。

私たちは難民センターがあった釜山市にやっと着きました。」